

景観フォーラム

巻頭言

ウラジーミル・プーチンによるウクライナ侵略戦争が始まって既に一年と2か月になります。プーチンは自分の政権維持に隣国との紛争を活用してきました。そのやり方は元ロシア連邦に属していた小さな隣国に難癖を浴びせ戦争を仕掛けるという方法です。戦争はそこそこの需要をもたらす、戦争特需に恩恵を被る層も生まれております。ウクライナ侵攻の場合は短期で締め括る筈であったものが、誤って長期になってしまったというのが現実でしょう。恐らく今プーチンの頭をよぎっている手法は、戦争をだらだらと続け、来年の大統領選挙前まで伸ばし大勝利で収めた時点で大統領選挙に勝つというのが彼のシナリオではないかと考えます。

歴史を紐解きますとこのような極悪人は何度と出現しております。20世紀はヒトラーとスターリンでしょうか、彼らが支配した世界の色はやはり灰色で茶褐色じみた靄にかかった色合いでした。プーチンのロシア社会も次第に昨年よりも今年の方がこのような色彩に支配され始めているようです。普通に民主主義を唱えることができなくなった社会には色彩などはなくなるということでしょう。自由に発言ができなくなり、平等という考え方が押しやられ、コミュニティという人間の自然な集まりが不可能になり、それを実施しようとするとうるさく取り締まられるといういびつな構造です。何のための国家であるか、何のための社会か、何のためのコミュニティか、ひとつひとつが歪な世界になり、景観ですか？それって何のことですか？と言われる社会が待っているのです。

そもそも景観論は先ず「平和」と「人権」が存在してこそ論ずるべき対象です。戦争に晒された惨禍からは景観は存在しません。恐らくプーチンの頭には景観というものは存在せず、ピョートル大帝がロシアを統一した頃の光景が彼の頭を過っているに違いありません。プーチンのことは今回の会報で終わりにしたいと思うのですが、中々止める訳には行きません。それはプーチンの頭の中にあるプーチン帝国は、西は先ずウクライナを抑え、東は北海道がロシアの出口になる、という野望に終わりが見えないからです。残念ながらプーチン帝国に終わりはないでしょう。極悪人たちの頭にあるのはこの地球上の世界をすべて支配下にしなければ終わりが無いのですから。しかし、彼らも命あるもの、その命尽きた時点で新たな景観論を始めなければなりません。

NPO 法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

<日本景観フォーラム 2023 年度年間スケジュール>

※2023 年度とは 2023 年 4 月 1 日⇒2024 年 3 月 31 日のことです。

2023 年

- 4 月 22 日 (土) 16:30 オンライン会議 **第 1 回景観研究会** 総会・第 1 回理事会
- 5 月 6 日 (土) **第 1 回景観まちあるき** (浦賀)
- 6 月 20 日 (火) 18:00 **第 2 回景観研究会** 於: JICA 研究所
- 7 月 29 日 (土) **第 2 回景観まちあるき** (立川? 福生?)
- 8 月 19 日 (土) ~20 日 (日) 特別景観視察会 (斑尾高原)
- 9 月 26 日 (火) 18:00 **第 3 回景観研究会** 於: JICA 研究所
- 10 月 28 日 (土) **第 3 回景観まちあるき** (検討中)
- 11 月 28 日 (火) 18:00 **第 4 回景観研究会** 於: JICA 研究所
- 12 月 21 日 (木) 忘年会

2024 年

- 1 月 20 日 (土) **第 4 回景観まちあるき** (検討中)
- 2 月 20 日 (火) 18:00 **第 5 回景観研究会** 於: JICA 研究所
- 3 月 23 日 (土) **第 5 回景観まちあるき** (検討中)

■以上のスケジュールは、ご提案ですので随時皆様のご意見を反映してまいります。

＜日本景観フォーラム 2022 年度年間実績＞

2022 年

- 4 月 12 日 (火) 15:00 東京都訪問 (神宮外苑再開発を問う)
4 月 19 日 (火) 16:30 オンライン会議 **第 1 回景観研究会**
5 月 20 日 (金) **第 1 回 景観まちあるき** (神宮外苑・表参道)
6 月 21 日 (火) 16:30 オンライン会議 **第 2 回景観研究会** **第 1 回理事会**
7 月 26 日 (火) 16:30 オンライン会議 **第 3 回景観研究会**
8 月 20 日 (土) / 21 日 (日) **特別景観視察会** (斑尾高原)
8 月 30 日 (火) 16:30 オンライン会議 **第 4 回景観研究会**
9 月 24 日 (土) **第 2 回 景観まちあるき** (王子・駒込界限)
10 月 25 日 (火) 16:30 オンライン会議 **第 5 回景観研究会**
11 月 29 日 (火) 16:30 オンライン会議 **第 6 回景観研究会**
12 月 3 日 (土) **第 3 回 景観まちあるき** (神保町界限)
12 月 27 日 (火) 16:30 オンライン忘年会
-

2023 年

- 1 月 21 日 (土) **第 4 回景観まちあるき** (茅ヶ崎)
2 月 21 日 (火) 16:00 オンライン会議 **第 7 回景観研究会** **第 2 回理事会**
3 月 23 日 (木) 16:00 オンライン会議 **第 8 回景観研究会**

東京の公園 新宿中央公園、ミヤシタパーク、南池袋公園

豊村泰彦



新宿中央公園



新宿ナイアガラの滝（新宿中央公園）

■大都会の公園

今回のテーマを「公園」にしたのは、公園が私たちの身近にあって「景観が重視される場所」だと思うからである。この「景観が重視される場所」というのは自分の「先入観」かもしれないが、もう一つ「公園は自由な場所である」という先入観もある。

「公園」は都会にありとうと田舎にありとうと共通の定義がある。それは「公衆が憩いまたは遊びを楽しむために公開された場所」ということで、自治体や公共的な団体が運営しているものを「公園」と呼んでいる。この定義からすると、公園は誰もが自由に使っている場所というより、憩い、遊びという目的をもっている人が使う場所としているようである。つまり公園というのはみんなの場所であるから何をしても自由というわけではない。公園を使う他の人や生き物に気を配りながら規則を守って利用しようという場所なのである。それでも図書館の中よりは自由である。

ただ東京のような大都市では田園風景が広がる地方に比べのびのびできる場所が少なく、公園は都市生活にとって欠かせない存在であることは間違いない。また、公園にいて癒されるという効果も見逃せない。それだけに私たちの身近な公園がこれまでどんな変遷をたどって今があるのか興味あるところである。そこで大都市東京で一番人が集中する場所、新宿駅、渋谷駅、池袋駅のそれぞれに近い公園を訪ね、景観を眺めながらいろいろ考えてみたい。



旧淀橋浄水場六角堂（新宿中央公園）

■新宿～新宿中央公園

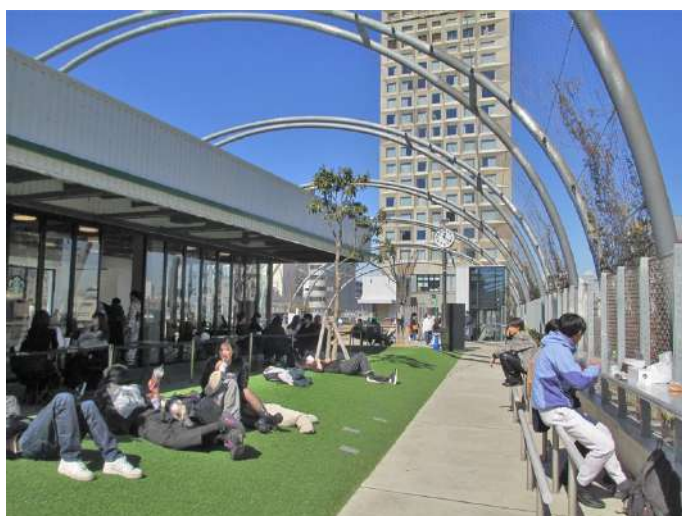
新宿区西新宿にある新宿中央公園は、かつて淀橋浄水場だった場所を改修し、昭和43年に都立公園として開放した公園である。昭和50年、東京都から新宿区に移管され、その後数回にわたり大規模な改修工事が行われ、現在に至っている。この公園は公園面積が約8万8千平方メートルと広大で、小さな子供から大人まで楽しめる遊具のある広場やイベントが開催できる広場など、様々な要求に応えられる多様な施設が備わっている。

江戸時代、この辺り一帯には広大な池があったそうである。その周囲には多数の茶屋ができ、景勝地池として賑わっていた。明治時代には大きな料亭が花柳界として知られるようになり、最盛期には料亭茶屋が100軒、芸子が300名ほどもいたという。ボート、屋形船、釣り、花火などげの娯楽が盛んに行われたが、昭和43年に埋め立てられ現在のような姿となった。公園の横には今も昔の面影を留める熊野神社がある。

現在の公園は周囲をホテル、オフィスビルに取り囲まれ、その中にあって四季折々の草花や多種の樹木と広い芝生が、都会のオアシスを形成している。このような公園に来ると天気良ければ景色を見ながら何か飲みたくなる。昼時にはベンチやテーブル席のある場所で昼食が食べられる。休日になると、芝生にレジャーシートを敷き家族でお弁当を広げる光景も見られるのだろう。公園の近くにはコンビニやテイクアウトもできるカフェがあるのであすぐに買ってこられる。公園自体がカフェの一部になっているようだ。新宿中央公園のような大都市の公園にはコンビニやカフェの存在は必要条件なのだろう。

訪問したこの日、晴天のせいか公園は柔らかな空気に満ちあふれていた。この空気を実感したくて公園に来る人も多いだろう。新宿のような大都会は忙しいビジネスマンにとっては競争の場である。そのような人たちがしばし休息をとり、心を休める場所にもなっているのだ。

新宿中央公園というと、かつて公園内や新宿駅から公園までの通路の一部に、ホームレスによる段ボール村が形成されていたことがある。しかし、公園内にはダンボールはおろかその痕跡すらも今はないが、新宿駅までの通路にはダンボールの住宅らしきものが多少見られた。段ボールの中には人が入っていると思われるが、姿は見えない。住む権利を持っている人たちではないので、目立たぬように暮らしているのかもしれない。彼らは当局が強制的に撤去しない限り居座り続けるのだろう。当時のホームレスは数も多かったせいもあり脅威を感じたこともあったが、今はダンボールの数も少なく、回収しそこなった清掃局の忘れ物くらいに思われているのかもしれない。



ミヤシタパーク



■渋谷～ミヤシタパーク

多くの若者が集まることで名物になっている渋谷駅の近くで、新たなシンボルになりそうなのがミヤシタパークである。ミヤシタパークは公園と商業施設とホテルが一体となった全長約330mの低層複合施設で、もとは宮下公園があった場所である。パーク（公園）というより3階建ての細長い雑居ビルと言ったほうがふさわしい建築物だ。1階は全国のご当地グルメや昭和レトロ風喫茶店が集まった渋谷横丁となっており、1階から3階までは最先端のファッション、雑貨、カフェなどの店が入っている。

ミヤシタパークの屋上には開放的な公園が広がっているがデパートの屋上と大きな違いはない。屋上公園まで行くには階段かエスカレーターであるが、「公園に行くのにエスカレーターはないだろう」などと言って、階段で登ると足がつるなどして中高年層は必ず後悔する。だからここは若い人ばかりなのかと納得する。そして、屋上には公園と一体となったスターバックスがほぼ中央にでんと店を構えている。

屋上は、スケート場やボルダリングウォールがある。これは普通の公園では珍しい施設かもしれない。そういった比較的特殊な運動施設がある一方で人々がくつろぐベンチなどは少ない、芝生の広場もあるが、木陰のない芝生の上では日焼けの場でしかない。直射日光をあびてもニコニコしている層はどれだけいるかと考えるとこれは利用する層はかなり限られそうだ。間違いなく中高年層は敬遠するだろう。

そもそもの公園は、戦後復興期、焼け野原だった場所を戦災復興計画の一環で緑地公園とすることで誕生した。当時の宮下公園には3000本の木が植えられ、滑り台やブランコが設置された。その後高度成長期を迎えると、都市に人口が集中し、この地にホームレスが野宿するようになった。そして昭和から平成に入るとさらにはホームレスは増え続けてきたため、渋谷区は公園の老朽化工事とホームレスの一扫を同時に進めるため、大規模な再開発事業に取り掛かることとなった。

最終的に今のミヤシタパークになったが、一時渋谷区はスポーツウェアブランドNIKEと宮下公園の命名権と交換に公園の改修費用を全額負担してもらう契約をしたが、これは事実上破棄され、新たな連携企業の参入のもとで、改修工事が行うことになった。その連携事業者というのは三井不動産である。当然、この事業については、アーティストや市民団体による反対運動が起きた。しかし、ビッグなマネーが飛び交う開発事業の前には市民の声は封殺された。先程利用する人が少ないのではという疑問を提示したが、大規模な開発事業に際しては誰が利用するのかなんていうことはたいした問題ではないのかもしれない。



南池袋公園



■池袋～南池袋公園

池袋は新宿や渋谷と並ぶ山の手三大副都心の一つである。池袋駅の東西には巨大な百貨店が並び、そこを中心に大規模な繁華街が並ぶ。南池袋は北側は東池袋、東側は雑司が谷、文京区大塚、南側は目白、西側は西池袋に接している。池袋駅に近いところでは各種学校や大学、神社仏閣、緑地などが点在し静寂な環境が見られる。

豊島区立南池袋公園は池袋東口に近いところにある。公園は平成28年にリニューアルされ、広い芝生とおしゃれなカフェが特徴的な公園に生まれ変わったが、少ない樹木のために日陰が少なく、暑くてまぶしい公園となっている。リニューアル前は森と泉に囲まれた自然豊かな公園だったので、今とまったく違っていただ。ビルに囲まれている中では緑は極めて貴重ではあるが、それを維持するためにはそれなりの手入れは必要となる。それが放置されるとどんな悲惨な結末を迎えるか地域の人になってみて初めて分かった。それは新宿や渋谷で見られたホームレスの溜り場である。それに対して財政難もあり改善のための対策も効果が上がらず豊島区も頭を抱える状態だった。そこに目を付けたのが東京電力で、地下に変電所を建設する計画を持ち掛けたのである。これを区が認め東電側から受け取る費用で公園を整備しようということになった。その後、公園をどのようにするかで住民間でもめたこともあったが、2016年にリニューアルした今の公園がオープンしたのである。

リニューアルした公園はアメリカ西海岸風のオープンなカフェを中心とする公園で、それはそれで結構かもしれないが、問題はリニューアルで多くの樹木が伐採されたことで、これが地球温暖化対策として正しい選択なのかと考えるとブラボーではない。カフェを含めた公園の魅力向上を促進するため、「南池袋をよくする会」が設立され、定期的に話し合っているようだが、都市公園の樹木を守ることや増やすことなどについては話し合っているのだろうか。

それは景観の上でも地球温暖化ガス抑制というなかでも必要だが、その視点を忘れて、どんなに西海岸風だのお洒落なカフェだの言ってもそんなのは所詮目先を変えた偽物であって、その手のものはすぐに飽きられ、最後に残るのは環境悪化である。ホームレスが排除できたと喜んでそれは単に他に追いやっただけのことで、本当にいなくなったわけではない。公園整備の目的はホームレスが宿泊できる環境をつくらないことで、大工事をしなくても自治体の本気に取り組む気があれば改善できたかもしれない。お金をかけたくない地元や行政がその場をしのいだけで、本質的な問題に向き合っていなかったのでは、という疑問が残る。ホームレス対策を含めた整備にお金をかけてでもかつての南池袋公園の森を守ったほうがよかったのではなかったか。もちろんいまさら何を言っても始まらないし、まして外部の人間で言うべきことではないが、現在いろいろなところで公園の緑を伐採する問題が噴出しているところであり、そういった問題を考える上で、参考になる事例ではないだろうか。

さて、今回は人が最も集まる大都市の公園とそれに関連して公園の樹木の伐採の問題を取り上げたが、都市の公園にはまだまだいろいろな課題がありそうである。

景観まち歩き 茅ヶ崎

石見茂夫

（茅ヶ崎周辺の町並み）

2023年1月21日（土曜日）、本年最初のまち歩きが湘南の茅ヶ崎界隈で行われました。正午にJR東海道線茅ヶ崎駅に集合してスタートしました。駅の北口側は市役所や市民文化会館等の公共施設と大型の量販店などの大規模な建築物が多く街並みも整然とした感じです、一方海側の南口は昔からの町並みが続き道路も狭く雑然とした様相で対照的な景観に成っている。

茅ヶ崎駅南口から東に真っすぐ太平洋に向かって延びる道路は雄三通りと言われ、当地出身の加山雄三氏の名前から名づけられている。

駅から海へと向かう中間点近くで直角に交差する「鉄砲道」と名付けられた東西に一直線の道路は、雑然としたこのエリアでは異色な感じに整備されているのが面白い。

江戸時代に海岸周辺に鉄砲場があった事から、この名前が道路につけられたようだ。

鉄砲道の途中のイーストコート2102に有る「JAZZ麺2.7」と言う変わった名前のラーメン屋さんで昼食となりました。

昼食後は鉄砲道から海方向の住宅地の路地に入り「開高健記念館」に向かう。

道中には大きなクロマツに囲まれた大きな邸宅が有る一方、新興住宅の様な小さな住宅も多く建ち新旧住宅が混在している。



(開高健記念館)



作家の開高健は1974年（昭和49年）に茅ヶ崎の東海岸に移り住み、1989年（平成元年）に亡くなるまで当地を拠点に作家活動をしていた。記念館はその業績や生活を往時のまま保存展示して元の邸宅を「開高健記念館」として開設されている。

開高健の自筆原稿や愛用の品々を展示している。趣味で愛用した釣り道具や釣りに関係した資料も多く展示されおり愛好家の興味を駆り立てている。

<https://www.kaiko.jp/>



(茅ヶ崎ゆかりの人物館)

開高健記念館の隣接地に「茅ヶ崎ゆかりの人物館」がある。茅ヶ崎の出身者や住居を構えたり仕事をしたりした当地に縁のあった方々の調査研究し、その成果を市の内外に発信する拠点として（平成27年）に開設された。開高健記念館の隣接地に茅ヶ崎市の新しい交流拠点として、まちづくりや地域の人々を結ぶ次世代型の施設として活用されている。

木々に囲まれた建物前の木製のウッドデッキのテラスは、散策途中の休憩地や交流場所として活用されている。

https://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/bunka_rekishi/1020607/index.html



(茅ヶ崎海岸周辺住宅地)



東海岸の住宅地から南の茅ヶ崎海岸に向かう。海岸近くには西洋風のリゾートマンションのしゃれた建物が多くなる。白壁にスペイン瓦の建築物にヤシ類や常緑樹が植えられたランドスケープは南欧の様な雰囲気漂い内陸部の住宅地とは異なった趣を醸し出している。

(国道134号線)



茅ヶ崎海岸沿いを東西に貫く国道134号線は神奈川県のパシフィック沿いの幹線道路として片側2車線の車道と両サイドの歩道が整備されている。

この道路はかつて逗子市及び鎌倉市から藤沢市にかけて海沿いを通っていた「湘南道路」と言われた有料道路でした。茅ヶ崎付近は当時まだ整備が進んではいない区間で21世紀に入ってから一気に4車線化に整備されている。

茅ヶ崎海岸脇のこの国道は箱根駅伝の第3区間として戸塚中継所と平塚中継所の中間部分にあたり、正月の大会時には多くの人々が応援に訪れる場所でもある。

(茅ヶ崎海岸)



国道134号線を渡ると直ぐに飛砂防止のための湘南海岸砂防林を抜けると茅ヶ崎海岸に出る。

砂防林沿いの遊歩道は散策する人達やランニングの人達またサイクリングの人達に利用されている。

遊歩道の途中には砂浜の中にウッドデッキが作られており子供連れのファミリー層の人達で賑わいを見せている。

部分的には飛砂防止用のフェンスや竹垣が設置されており多くの植栽がされているが景観的な緑地として活用はされていない。

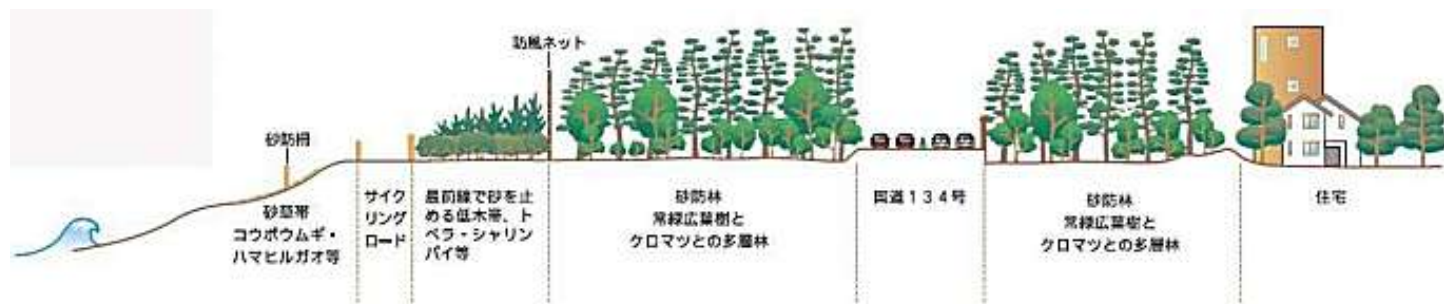
(神奈川県藤沢土木事務所 湘南海岸砂防林のHPより転記)

飛砂の被害の影響を防止することを最優先にした設備として重要なものとなっている。

植栽されている樹種はクロマツを主に塩害に強い常緑広葉樹が多く使われている。

湘南海岸では、毎年10月から4月にかけて、時折強い南西風が吹き荒れます。かつては飛砂(堆砂)で国道134号が通行止めになるなど海岸地域の生活に大きな影響を及ぼしています。こうした飛砂や塩害、強風から県民生活を守り、さらに沿岸地域の景観を彩り自然環境を保全する重要な緑地として、砂防林の保護育成を進めています。

湘南海岸砂防林は、他の地域の海岸林や砂防林と比較して、汀(てい)線(波打ち際)から林までの距離が短く樹木が飛砂や潮風の害を受けやすい厳しい環境に立地しているうえ、林の幅が狭く樹木の僅かな枯れでも砂防林の機能に大きな影響を与えてしまうという条件にあります。



砂防林断面図

そこで、砂浜では飛砂を抑制する砂草(コウボウムギやハマヒルガオなど)の育成を図るとともに、砂防柵を設置し飛砂を抑制し、樹林部では南側に特に飛砂に強い広葉樹の低木帯を設けたり、防風ネットを設置したりして、砂防林を維持しています(図2参照)。単一樹種の林より多様な樹種による林の方が生態的に強いことから、当初から植栽されているクロマツに加え、アキグミ、ウバメガシ、スダジイ、モチノキ、タブノキ、ヒメユズリハ、ヤブニッケイ、ヤブツバキ、ヤマモモ、カクレミノ、ネズミモチ、トベラ、マサキ、シャリンバイの計15種に自然に侵入した樹木を加え、諸害に強い砂防林育成を行っています。

砂防林の防風効果が及ぶ範囲は、樹高に比例することが研究成果から知られており、樹高 10m 程度の砂防林の場合、風上側に数十 m、風下側には 200m から 300m 程度の範囲に防風効果が及ぶと推定されます。



飛砂防止フェンス、竹垣



サザンビーチのオブジェ

<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/ex5/saborin/index.html>

(茅ヶ崎館)



茅ヶ崎海岸から国道１３４号線を横断し市街地方面に向かう、今回のまち歩きの最後の訪問箇所である「茅ヶ崎館」を目指す。

茅ヶ崎館は明治３２年（１８９９年）に創業し当時は砂丘の上の一軒屋の建物があるだけで、茅ヶ崎海岸には大きな施設はありませんでした。同じ頃に別荘地や療養地としてサナトリウム病院の南湖院が開設され茅ヶ崎が一般的に認知され始めました。その後には歌舞伎関係の芸能関係者、小説家や脚本家の別荘ができ集まりはじめ、更に映画関係の監督や役者が宿泊して多く集まるようになり茅ヶ崎館の利用者は増えて来ました。茅ヶ崎館は湘南の古き良き時代を感じられる場所としてだけでなく、新たな創造の生まれる場所としてこれからも多くの人々に利用されるでしょう。

現在、茅ヶ崎館は大規模な改修工事中で館内の見学は出来ませんでしたが、周辺の庭と周りの修景を見学することができました。改修工事が終わる今春にはどのような姿に成るか楽しみである。

規模は小さくなくても歴史ある建築物は保存され有効に活用されることでしょう。



<https://chigasakikan.co.jp/>

<LFJブックレビュー 79>

『海』 ジュール・ミシュレ著 加賀野井秀一訳

1994年11月刊 (原書：1861年刊)

齊藤全彦

この『海』という書籍はドビュッシー（1862-1918）の交響詩『海』を聞きながら読むのがいいかもしれない。『海』という表題の書籍を前にした読者は一体何を想像するか。余りにも大きく、あまりにも漠然とした対象である。しかし、この書はかの有名なフランスの歴史家、ルネサンスという名辞を始めて用いた19世紀を代表する知性の代名詞でもあるミシュレ（1798-1874）の晩年における博物誌シリーズの一冊である。これ以外にも『鳥』（1956年刊）『虫』（1957年刊）『山』（1968年刊）などもあり、歴史家とはいえその目は森羅万象に及んでいる。代表作『フランス史』（1855年）以外にもその浩瀚な好奇心には目を見張るものがある。

さて、ドビュッシーの交響詩『海』は第1楽章「会場の夜明けから正午まで」第2楽章「波の戯れ」第3楽章「風と海の対話」というように3楽章からなっているが、歴史家ミシュレの『海』は第1部「さまざまな海の姿」第2部「海からの発生」第3部「海の征服」第4部「海による復活」という具合に堂々4つの楽章からなっている。第1部はまさに海の景観であり、岸から見た海から始まり海岸、砂浜、断崖それぞれの景観を語り、海流の様態を述べ、海そのものの脈動がどのようなものであるかに言及し、嵐とは何か、そして実際に遭遇した1859年10月の嵐を記録する。第2部では海こそは万物の創造者たることを証明するために、その多様性、微小生物の宝庫であり、そして「世の定めたる飢えは陸上のことでしかない。海では飢えは無視されている。食物を探する必要もない。生命は夢のようにただよっている……」と。海に漂う罪のない軟体動物に言及するかと思うと、戦争と陰謀を繰り返す甲殻類の世界を述べた後、海の世界の代表者である魚の様々な生態を探求し、そして地球の最大動物である鯨に到達する。「彼らは連れだって行くのを好む。昔は、誰もいない海の中を2頭ずつ、時には10頭などの大家族で泳いでいるのが見られたものだ。」そのような海の大パノラマ景観に行きつくとミシュレは何と人魚について語り始める。「16世紀に記録されている人魚は男女とも海上で目撃されたのではなく、陸上に連れてこられ飼育され見世物にされている。」と記しているミシュレは片やダーウィン（1808-1882）と同時代人であった。

さて第3部になると人間が海を征服するという風景が見えてくる。鯨を追うことになる人類にとってその生息する場、即ち北極と南極という今までに見たこともない自然景観を見ることとなり、まさに以下の自覚へと至る。「海はそこに調和をもたらすため、地球を維持し健全に保つため、大いに貢献している。恐らくは人類誕生以前の何百万世紀にもわたり、そうしたすべてのことがなされてきた。」そして最後に第4部では人類にもたらされた豊富な生命の源の海を身近に活用するすべを述べる。海水浴の進め、海のそばに住居を構えること、そして、海こそは生命を育み再生する源であることを西洋人は自ら活用すべきことを説く。

「大地は沈黙し、海は語る。これら二つの基本要素の間にはあまりにも大きな違いがある。海は一つの声であり、大地に岸に語りかけ、響くこだまと対話する。海の豊饒は海原の大いなる声となる。」（齊藤全彦）



〒150-0031
東京都渋谷区桜丘町 14-5-502
TEL : 03(3780)3814
FAX : 03(6379)6681
E-mail : info@keikan-forum.com
URL : <https://www.keikan-forum.org>

